「豊かな未来社会」とは

資料5－1

（1）「豊かさ」を考えるに当たって
「国土のグランドデザイン2050」における考え方を基本に据え、報告の冒頭に、「豊かさ」に対する考え方を明らかにする。

（2）「多様性」と「連携」
・「多様性」と「連携」とが重要なキーワード
（考え方）
・ 多様性を有する地域間で、1）機能を分担し、互いに補完する、2）目標を共有し、共に進化する、3）融合し、高次の発展を図る、ことができるようになり、圏域に対する高次のサービス機能の確保と新たな価値創造が可能になる。
・ 文化は、人々の営みの中でこそ育まれる。日々の営みの中で、家族、友人、地域、職場、学校等様々な人とのつながりを通じて、人は地域との分かちがたい関係を築き、その関係が、都会であれ、農山村であれ、地域への愛着となることで、そこが「ふるさと」になる。そして、その「ふるさと」が、長い年月を経て、それぞれの地域の特性と相まって、地域固有の文化を形成していく。
・ 小さな対流が生まれ、その積み重ねが創発を引き起こし、やがて大きな渦となって国土全体の大きな対流につながり、思いも寄らないような新たな価値を生み出していくよう、様々なレベルで対流を活発化させていく必要がある。

（3）2つの価値観の並存
・ グローバル社会の中での日本のあり方について、「国際志向」と「地域志向」とも言うべき2つの考え方、価値観を並存する2つのベクトルとして捉えていく
（考え方）
・戦後日本は、豊かさを目指し、奇跡とも言える経済成長を遂げてきた。そして、今日、グローバリゼーションが進展する中で、豊かさを維持、発展させるため、さらなる成長が求められている。それを可能とするためには国際社会での競争を勝ち抜いていく必要があり、積極的に国際社会に打って出て行くべし、といった考え方、価値観が強くなってきている。
・一方、従来型の経済一辺倒の豊かさではなく、自然や地域との触れ合いを大切にする生き方も求められており、田園回帰と呼ばれるように、地域を志向し、地域を大切にしたいという若者も増えてきている。
・このような価値観を対立概念として捉えるのではなく、社会を評価する上での2つのベクトルのようなものとして捉えていく必要がある。特に、個人と個人、地域と地域がグローバルに結ばれる時代にあっては、どのような個人、地域であっても、多かれ少なかれ複眼的な見方がこれからは必要となっていくと考えられる。

「豊かな未来社会」に「自動車」が寄与できること

国土交通省

【機密性2】

（1）「多様性」を確保するための「ネットワーク」「地域産業」としての側面

・自動車を使用する運送業、整備する整備事業は、地域の移動ニーズ、整備ニーズに応えるものとして、従来も、また今後とも重要な役割を担っている。移動ニーズ、整備ニーズは、各地域で人々が諸活動を行う基盤となるものであり、「多様性」の確立のために必要不可欠のものである。特に、自動車交通は、地域に密着した交通手段として、人々に一番近いところで生活を支え、まさに「ふるさと」の形成に役立っている。

・また、こうした側面と並んで、事業を行う企業が、地域の雇用の重要な支え手となり、地域経済を支えていることも重要な役割である。「多様性」を「ふるさと」で確立するに当たっても、そこで人々が生計を営むことができることは大前提となるものであり、こうした点からも「自動車」の寄与できることは大きい。

（2）「連携」を確保するための「ネットワーク」としての側面

・「自動車」の持つ特性のうち、特に「ネットワーク」に着目すると、「多様性」を確立した各地域を結ぶ「連携」の確保に 対して、大きな役割を担うことがわかる。人、モノの交流が新たな価値創造を生み出す中で、「自動車」は人の移動（バス・タクシー、自家用車）、モノの移動（トラック）いずれにおいても必要とされている。

（3）「国際志向」と「地域志向」の並存に寄与する「自動車」

・自動車製造業は、我が国の経済主体の中でも大きな実力を持ち、国際的な競争力を持つ。世界中で購入される車を製造するという販売競争力はもちろんのこと、ハイブリッドカー、電気自動車、燃料電池車など、理想の自動車を次々と生み出し世界をリードする技術開発力の面でも世界の先頭を走る。この観点からは、「国際志向」を牽引する主体として、経済界での期待も大きい。

・一方、軽自動車、超小型モビリティ、二輪車、パーソナルモビリィティ等は、今後の高齢社会、地域社会における移動にも大きく貢献することが期待され、「地域志向」の面でも大きな役割を担っていく。この両面を担っていくことから、2つの価値観の並存にも、「自動車」は大きく関わっていくことになる。